

一般口演 | その他

一般口演36 (III-OR36)

その他

座長:川崎 志保理 (順天堂大学 心臓血管外科)

座長:橘 剛 (北海道大学大学院医学研究科 循環器・呼吸器外科)

Sat. Jul 7, 2018 1:00 PM - 1:55 PM 第4会場 (303)

[III-OR36-04]両側肺動脈絞扼術に対するバルーン拡張術の有用性

○山下 尚人¹, 倉岡 彩子¹, 兒玉 祥彦¹, 石川 友一¹, 中村 真¹, 佐川 浩一¹, 石川 司朗¹, 小田 晋一郎², 中野 俊秀², 角 秀秋² (1.福岡市立こども病院 循環器科, 2.福岡市立こども病院 心臓血管外科)

Keywords:両側肺動脈絞扼術, 経皮的肺動脈バルーン拡張術, 肺動脈狭窄

【背景】左心狭窄疾患に対して両側肺動脈絞扼術(bPAB)による待機手術が有用とされるが、一方で肺動脈狭窄のリスクが上昇することも報告されている。当院では Norwood+BDGや二期的根治術症例に低酸素血症改善や肺血管発育を目的として、バルーン拡張術(BAP)を行っている。【目的】 bPABに対する BAPの有効性を明らかにすること。【対象】 2015年7月から2017年8月までに bPABを施行した41例のうち、BAPを行った15例(36.5%)を対象とし、診療録より後方視的に検討した。【結果】 男児10例、疾患は HLHS /類縁疾患6例、左室流出路狭窄+ CoA/IAA complex 5例、単心室+ CoA/IAA complex 3例、総動脈幹症1例。在胎週数は平均38.1週、出生体重は平均2647g、胎児診断症例が10例。平均8.7生日で bPABを施行し(周径9-11mm)、7例に絞扼テープを2段階に結紮する工夫を行った。BAPは bPABから平均126日で施行し、主に3.5mm (3.25-4.0) の冠動脈バルーンを使用した。BAP後、SpO2は平均77%から84%に上昇した。1例で一過性房室ブロック、1例で房室弁逆流増悪を認めた。平均217生日で9例が Norwood手術または根治手術へと進み、そのうち5例は肺動脈形成が不要であった。PAIは平均で bPAB前183 mm²/m²から根治手術前284 mm²/m²と上昇した。根治手術前の PAIは BAP未施行群 (162 mm²/m²) と比較し、BAP群がより大きい傾向があった (p=0.11)。さらに PAIの上昇は bPABを工夫した群 (Δ141 mm²/m²) で、工夫なし群 (Δ94 mm²/m²) より上昇した (p=0.09)。【結語】 bPABに対する BAPは、低酸素血症改善や肺血管発育に有益であり、重要な治療選択の一つになる。